

# フランス語の「理由」を表す接続詞 *car* — *Parce que* との比較において —

秋廣 尚恵

はじめに

1. 使用コーパスと調査方法について
2. コーパス毎に見た 4 つの接続詞の分布
3. 規範文法における 4 つの接続詞の比較
4. *Parce que* の 2 つの用法
5. 書き言葉コーパスに現れる *car*
6. 話し言葉における *car*

結びにかえて

はじめに

フランス語でいわゆる「因果関係」を表す接続詞には、*car*, *comme*, *parce que*, *puisque* がある。伝統文法の分類では、*car* は等位接続詞、それ以外は従属接続詞として分類されている。

本稿では、まず、4 つの異なるレジスター<sup>1)</sup> のサンプルとなるコーパスを参照しながら、それぞれのコーパスにおける、4 つの接続詞の頻度数の比較を行う。次に、*car* について取り上げ、*parce que* と比較しながら、その用法と機能を記述する。

伝統文法では「等位接続」と「従属接続」の間の区別は自明の理であり、*car* と *parce que* もこの 2 分法的な観点から説明されることが多かった。しかし、実際の例を見る限り、両者の区別は揺らいでいるように思われる。本稿では、コーパスに依拠しつつ、固有なレジスターの中では、*car* の従属接続詞的な用法、また *parce que* の等位接続詞的な用法が出現することを示し、この 2 分法の問題点を明らかにする。

## 1. 使用コーパスと調査方法について

### 1. 1. 使用コーパス

書き言葉に関しては、以下の 2 つのコーパスを利用する：一つは、Frantext である (<http://www.frantext.fr>)。これは、ロレーヌ大学と CNRS の共同研究グループである ATILF<sup>2)</sup> によって開発されたデータベースだ。今回は、2000 年以降の文学作品に絞って調査を行った。もう一つは、ELRA<sup>3)</sup> による日刊新聞 *Le Monde* (ル・モンド) コーパスである。残念ながら、新

しい版が入手できなかったため、1998年版を使用した。だが、新聞のように、公的でフォーマルな書き言葉は、20年、30年という長い期間を経て変化していく傾向があるため、この年代のコーパスの使用は問題に当たらないと考えた。

話し言葉に関しては、以下の2つのコーパスを利用する：一つは、東京外国語大学が作成したフランス語話し言葉コーパスである (<http://cblle.tufts.ac.jp/tag/fr/index.php>)。 (以下、TUFSと呼ぶ)。これは、主に親しい者同士のインフォーマルな対話を主とするコーパスである。さらに、オルレアン大学、ESLO<sup>4)</sup> プロジェクトにより収集された話し言葉コーパスを参照する (<http://eslo.huma-num.fr/>)。 (以下、ESLOと呼ぶ)。とりわけ公的な場でのフォーマルな話し言葉 (講演・演説・研究者へのインタビュー) の例のみを抽出し、TUFSと比較する。

## 1. 2. コーパス駆動型の調査

コーパスを活用する方法には、大きく分けて、コーパス基盤型 (*corpus-based*) とコーパス駆動型 (*corpus-driven*) がある。この2つの方法は相補的なものであり、どちらも言語記述にとっては重要である。

コーパス基盤型は、大規模データに現れる全ての例を一斉に統計処理する手法である。当然、頻度数の高いものを中心的なもの、そして、頻度数の低いものを周辺のものとして分類しつつ、記述することになるので、どのような特徴が言語の中に定着しているかを知る上ではとても有効な手段であり、「標準フランス語」の記述に適している。

一方、コーパス駆動型は、コーパスの質的な違いに重点を置いた記述を行うことを目的とする。均質な特徴を持ったデータごとにコーパスを分け、それぞれに現れる現象を比較するので、レジスター毎の違いを明らかにし、一つの言語を立体的に記述するのに適している。

接続詞の使い分けには、レジスターの違いが少なからず影響をもたらしていると考えられるので、本稿では、コーパス駆動型の手法を用いて記述を進めることにする。

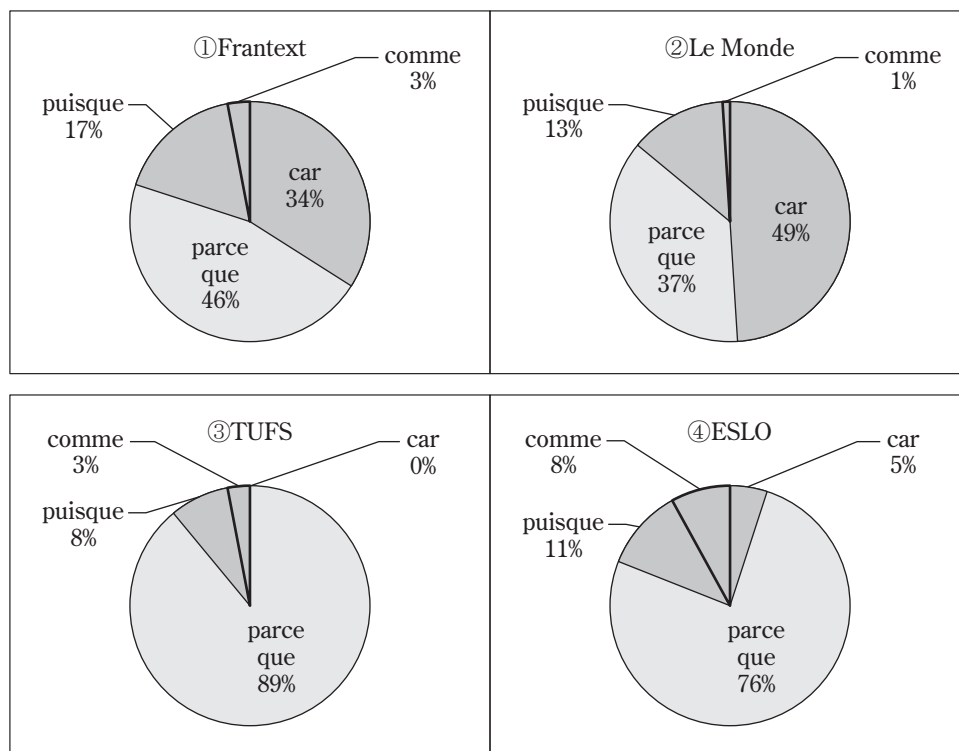
## 2. コーパス毎に見た4つの接続詞の分布

① Frantext、② Le Monde、③ TUFS、④ ESLO に現れる4つの接続詞の頻度を比較した結果を表1とグラフ1に示す。

表1：それぞれのコーパスに現れた4つの接続詞の頻度数

コーパス	<i>car</i>	<i>parce que</i>	<i>puisque</i>	<i>comme</i>
Frantext (文学作品)	4511	6172	2232	448
Le Monde (新聞)	378	291	104	6
TUFS (日常会話)	7	2050	175	59
ESLO (講演・インタビュー・メディア)	9	121	17	13

グラフ 1: 各コーパスに占める 4 つの接続詞の割合



Car が最も大きな割合を占めるのは、① Le Monde (49%)、次いで② Frantext (34%) である。また、話し言葉においては、フォーマルな話し言葉の④ ESLO (5%) が、インフォーマルな話し言葉の③ TUFS (0%<sup>5)</sup>) を上回っている。

Parce que は、書き言葉に比べて、話し言葉で、非常に大きな割合を占めている。③ TUFS では、その割合が最も高く 89%、④ ESLO は 76% である。

Comme については、④ ESLO で 8% と最も高いが、それ以外のコーパスでは、いずれも 1~3% とごく少数に留まっている。

Puisque は、話し言葉よりも書き言葉の方が若干多く現れており、① Frantext で 17%、② Le Monde で 13% となっている。話し言葉では、フォーマルな④ ESLO (11%) がインフォーマルな③ TUFS (8%) を上回っている。

この調査の中で、とりわけ注目したいのは、car と parce que の各レジスターにおける分布の決定的な違いである。Car は、書き言葉では頻度が高いのに対し、話し言葉では極めて頻度が低い。また、同じ話し言葉であっても、もっぱらフォーマルな話し言葉に現われ、インフォーマルな日常的会話ではほぼゼロに近い。この傾向は、Blanche-Benveniste (2002 : 14)、Blasco-Dulbecco & Capeau (2012 : 30) でも指摘されている。一方、parce que は話し言葉において、

圧倒的に多く使われる接続詞である。この傾向はインフォーマルな話し言葉においてより顕著である。この結果は、Débaisieux (2013 : 187) の調査結果とも一致している。

### 3. 規範文法における 4 つの接続詞の比較

規範的な辞書や文法書には、4 つの接続詞が異なった統語的特徴を見せることが指摘されている。例えば、*Trésor de la langue française informatisé*<sup>6)</sup> (以下、TLFi) では、① *Que* による受け直しが可能かどうか、② 主節に先立つことが可能かどうか、③ 副詞による修飾が可能かどうか、④ 節を否定することが可能かどうか、⑤ *c'est...que* 強調構文への書き換えが可能かどうか、という 5 つの基準に従って、4 つの接続詞の統語的特徴の違いを説明している。以下に TLFi で引用された例を示しつつ、それぞれの基準について見ることにしよう

#### ① *Que* による受け直しが可能か

(1) *Je vais recommencer... Je... vais... recommencer... parce que... parce que... je suis fou de vous... de toi... Célestine... **parce que** je ne pense qu'à ça... **que** je ne dors plus... **que** je me sens tout malade...*

私は再び始めるだろう。私は…再び始める…だろう。なぜなら…なぜなら…私はあなた、セレスティーン、君に狂っているのだから…なぜならそれしか考えられないし…もう眠ることも出来ないし…とても病にかかってしまったような気がするから…

(TLFi : MIRABEAU, *Journal femme ch.*, 1900, p.80)

この例では、*parce que* 節によって、幾つかの「理由」を列挙している例であるが、3 つ目の節以降では、*parce que* を繰り返す代わりに、*que* によって繰り返していることに注目したい。このように、フランス語では、*parce que* に限らず、一般に、従属接続詞 (*comme*, *puisque* はもちろんのこと、*si* など) を繰り返す際、*que* によって受け直すことが可能である。これに対し等位接続詞 *car* は、*que* による受け直しが不可能であるとされている<sup>7)</sup>。

#### ② 主節に先立つことが可能か

(2) ***Parce qu'**elle manqua de courage cette nuit-là, Lisette de Bihan devint la chose de François Guillermin.*

その夜、勇気がなかったので、リゼット・ドゥ・ビアンはフランソワ・ギエルのものになってしまった。

(TLFi : QUEFFELEC, *Recteur*, 1944, p.146)

この例では、**parce que** 節が主節の前に現れている例である。ただし、実はこのような例はまれである。Rigiel, M. et al. (2011 : 850) では、**parce que** が文頭に現れる場合には、談話の中で主題となる要素を導入する機能を持っているという。また、通常、「理由」を文頭に示す場合には、**parce que** ではなく、**comme** を用いることが多い。「理由」を表す **comme** は常に主節の前に置かれる。一方、**puisque** は、比較的位置が自由であり、文脈に応じて、主節の前にも後にも置かれ、時には、主節の内部に挿入されることもある。**Car** は常に主節の後に置かれなくてはならず、主節に前置されることはない<sup>8)</sup>とされている。

### ③副詞による修飾が可能か

(3) **Précisément parce que cet état est constant, il suscite tout un mécanisme d'images.**

まさにこの状態が続いているので、それが映像のメカニズム全体を生み出すのだ。

(TLFi : DURKHEIM, Divis. Trav., 1893, p.25)

ここで **parce que** 節は **précisément** (まさに) という副詞によって修飾されている。この位置に現れる副詞には他にも **justement** (まさに)、**particulièrement** (特別に)、**seulement** (ただ)、**surtout** (とりわけ)、**uniquement** (ただ) などがある。これらはいずれも「範列化の副詞」とも言われ、競合しうる **parce que** 節が範列関係において潜在的に存在することを前提としている。つまり、解釈としては、「(いろいろな理由の中でも) まさにこの状態が続いているので」という意味になる。

### ④節を否定することが可能か

(4) **La société punit, non parce que le châtement lui offre par lui-même quelque satisfaction, mais afin que la crainte de la peine paralyse les mauvaises volontés.**

社会は罰するのだ。懲罰がそれ自体社会になんらかの満足をもたらすからではなく、罰への恐れによって悪意を麻痺させるためなのである。

(TLFi : DURKHEIM, Divis. Trav., 1893, p.53)

このように **parce que** 節のみを否定できるということは、裏を返してみれば、否定された節以外の「理由」を説明する節が潜在的に存在することを前提としていると考えることが出来る。つまり、副詞の付加の場合と同様、ここでも **parce que** 節の範列化が可能なのである。また、否定形という点について、さらに補足しておくと、主節の動詞を否定した場合、否定はむしろ **parce que** 節に係る傾向がある。例えば、Rigiel, M. & al. (2011 : 851) によれば、**Pierre n'a**

**pas été renvoyé parce qu'il est l'ami de Jean.** という例では、「ピエールはジャンの友達だからといって解雇されたわけではない。」と解釈されると述べている。一方 **car** 節を使った場合には、これとは全く逆の意味になるという。**Pierre n'a pas été renvoyé, car il est l'ami de Jean.**（「ピエールは解雇されなかった。というのも、ジャンの友達だったからだ。」）主節動詞の否定形は **parce que** 節には影響を及ぼすが、**car** 節には及ぼさない。

⑤ **C'est...que** による強調構文が可能か

(5) **Et c'est parce qu'il l'aime trop que vous lui dites de ne pas l'épouser ?**

そして、あなたが彼に彼女と結婚しないようにと言っているのは、彼があまりにも彼女を愛しすぎているからなのです。

(TLFi : CLAUDEL, Père humil., 1920. p.343)

フランス語学では、一般に、**c'est...que** 構文によって強調される要素は、**que** 以下に現れる動詞の統語的な支配を受ける。次章の 4 に見るように、この構文に書き換えが可能な接続詞は、**parce que** 節の一部の用法だけ<sup>9)</sup>であり、**car, puisque, comme** のいずれの節も、この構文への書き換えは不可能である。従って、「理由」を表す状況補語として動詞の支配を受けるものは、**parce que** 節のみであると言える。

さて、以上の統語的基準に 4 つの節がそれぞれどのように応じるかを以下の表にまとめておく。

表 2 : 4 つの接続詞の統語的特徴

統語的基準	Car	Comme	Parce que	Puisque
① Que で受け直し	不可能	可能	可能	可能
②主節に前置	不可能	主節の前のみ	可能だが稀	可能
③副詞の付加	不可能	不可能	可能	不可能
④否定される	不可能	不可能	可能	不可能
⑤ <b>C'est que</b> 構文	不可能	不可能	可能	不可能

さて、これらの統語的基準はそもそも何を計るものなのであろうか。①で問題になる接続詞 **que** は、一般に、主節への従属を表す無標のマーカーであると考えられている。**Que** により、受け直しが出来るということは、とりもなおさず、その節が主節に従属していることを示している。②は、情報構造的なレベルでの語順の問題である。**Car** が主節に後置される理由は、

car が多くの場合、前置される主節に対して説明を行い、新たな情報をもたらすという機能を果たしているからだと考えることが出来る。③と④と⑤は、いずれも、主節動詞への依存を示す基準であると考えられる。③、④、⑤の基準を多く満たすものほど、主節動詞の支配を強く受け、従属度が高くなると考えていだろう。

こうした統語的テストにより car と parce que が全く異なった対極的な統語的性格を持っていることが分かる。Car は主節動詞の支配を受けない等位節を導くが、parce que 節は、主節に対して従属するだけでなく、主節動詞によって統語的に支配される状況補語節としての機能を果たす。また、comme と puisque は、いずれも、car と parce que の中間的なステータスを持っていると考えることが出来る。つまり、主節に対して従属する点では、parce que に近い性格を持つが、主節動詞の支配から自由である点では、むしろ car に類似した性格を持つといえる。

#### 4. Parce que の 2 つの用法

##### 4. 1. 接続詞と談話的コネクター

以上が、4 つの接続詞の相違についての規範的な辞書の説明である。規範文法で用いられている統語的基準やそこから導き出される結果は確かに重要であり、無視することは出来ない。だが、以下にみるように、話し言葉の parce que には、主節に統語的に従属しているとは考えられない用法も存在しており、そうした用法を見ると、car と parce que の区別が規範文法で言われているほど、はっきりしたものではないことが分かる。

Parce que には、その統語的特徴から、以下のように、大きく分けて 2 つの用法が存在する。

(6) Pierre est resté parce que Jean était parti.

ピエールは残った。なぜなら、ジャンが行ってしまったから。

(7) Pierre doit être là, parce que je vois sa voiture garée en double file.

ピエールは居るはずだ。なぜなら、彼の車が道路沿いに停めてあるから。

(Débaisieux, 1994 : ch.2-2)

1 のタイプを parce que A、2 のタイプを parce que B と呼ぶ。Débaisieux (2013 :158) の調査によると、話し言葉コーパス CRFP<sup>10</sup> に現れた parce que の用法の 78% が parce que B であったという。また、parce que A と parce que B に、先に挙げた①から⑤の統語的基準を当てはめてみると以下の結果が得られる。

表 3 : *Parce que* の 2 つの用法

統語的基準	<i>Parce que</i> A	<i>Parce que</i> B
① <i>Que</i> で受け直し	受け直す	受け直す
② 主節に前置	前置も可能だが稀	不可能
③ 副詞の付加	可能	不可能
④ 否定される	可能	不可能
⑤ <i>C'est que</i> 構文	可能	不可能

Débaïeux (2013) は、*parce que* A を主節に従属する節を導く機能を持つ「接続詞」、*parce que* B を「談話的コネクター」と呼んでいる。前者はマイクロ文法（文内文法）のレベルで、主節動詞の動詞句を構成する状況補語節を結びつける機能を果たす。後者は、マイクロ文法のレベルで依存関係を持たない 2 つの要素<sup>11)</sup>を、マクロ文法（談話文法的）レベルにおいて結びつける機能<sup>12)</sup>を果たしている。以上の分析から、*parce que* B が非常に *car* に類似した特徴を示していることが分かる。

#### 4. 2. *Parce que* の機能拡張

*Parce que* の 2 つの用法をめぐる、意味論・語用論的な観点から、Groupe λ-I (1975) を始め、実に様々な議論が交わされてきた。Moeschler (2009 : 133) では、認知言語学的な視点から、Sweetser (1990) の *because* の分析を応用しつつ、*parce que* を①「因果関係」を説明する用法 (8)、②言語行為を正当化する用法 (9)、③認識論的用法 (10) の 3 つに分けている。

(8) *Le médecin soigne Axel parce qu'il est malade.*

医者はアクセルの治療を行った。彼が病気だったからだ。

(9) *Tu viens ? Parce qu'on est en retard.*

行くの（行かないの）？遅刻しているんだから。

(10) *Jean l'aime, parce qu'il est revenu.*

ジャンは彼女を愛している。戻ってきたんだから。

(Moeschler, 2009 : 131, 135, 136)

一方、Degan, & Fagard (2008 : 122-123) は、Traugott (2003) の（間）主観性と文法化の理論に基づき、主観性の低い事実の説明を行う「客観的用法」から、話者の主観的な認識の説明を行う「主観的用法」、さらには、話し相手に積極的に働きかける「間主観的用法」という段階を設け、*parce que* の用法を 5 つに分類し、*parce que* が「客観的用法」から「（間）主観的用法」へと領域を広げていったと考えている。現代フランス語では、機能拡張した *parce que* が *car*



に取って替わりつつあり、話し言葉では既に **car** の駆逐は完了したが、書き言葉では、まだその途上にあると指摘する。また、**car** については、古い時代から既に「主観的用法」「間主観的用法」が存在し、文法化という観点から見ると既に安定化した機能を持っているので、話し言葉と書き言葉では **car** の用法それ自体には質的な違いはなく、**parce que** との競合関係による量的な違いのみが観察されると結論している (Degan, & Fagard, 2008 :135)。

以上に挙げた 2 つの研究では、**parce que** の様々な意味効果を、認知言語学的視点から、「因果関係」もしくは「因果関係」から派生するものとして考えている点で共通している。一方、それに対し、Débaisieux (2013 :225)、飯田 (2013 :8) は、先に挙げられた 3 つの機能に加え、「情報を補足する」や「相手への確認・同意を求める」といった用法を挙げつつ、**parce que** が因果関係の表現だけではなく、様々な機能を果たしていると指摘する。

(11) Sloterdijk, en revanche, **parce qu'il** a décrété la mort de l'humanisme, ne peut envisager cette question et considère qu'une éthique ou un ersatz d'éthique ne pourra émaner que de l'« élevage » lui-même.

スロテルジクは、逆に、というのも人間性の死を宣告してしまったので、この問題に取り組むことが出来ず、倫理学や倫理学の代用品は「養殖 (人工的な産物)」それ自体からしか生じることしか出来ないと考えている。

(Débaisieux, 2013 : 200)

この例では、主題として与えられた Sloterdijk (スロテルジク) について **parce que** が挿入句的に主節の内部に入り、補足的説明を行っているとして Débaisieux (2013 : 200) は分析する。また次の例においては、**parce que** が独立したモダリティを持った発話 (ここでは疑問文) を導入していると指摘している。

(12) Maintenant a-après tout ce temps-là euh mieux vaut parler espagnol qu'allemand **parce que** l'all-allemand qu'est-ce que vous faites avec l'allemand

今は、あの頃も全部過ぎ去って、ううん、ドイツ語よりもスペイン語を話したほうがいい。だって、ドイツ語って、ドイツ語であなた何をするんですか。

Débaisieux (2013 : 79)

以下の例の **parce que** でも、独立性の高い発話を導入する役割を果たしていると考えられる。ここでは、**parce que** を削除しても文法的な誤りにはならないし、論理的な意味関係が変化す

るわけでもない。 *Parce que* は、 *une mezzanine # quand t'es toute seule, c'est pas mal* という独立した発話を導入しつつ、その発話に「確認」あるいは「同意の要求」というモーダルな価値を付与する用法で用いられている。

(13) A69 : j'avais un # T1, un T1, un studio de 35 m2 # avec mezzanine ## de 15m2 # en centre <ça c'est> # 390 euros.

B69 : ## ah ouais ##

A70 : donc eee

B70 : **Parce qu'**une mezzanine # quand t'es toute seule, c'est pas mal.

A71 : Ben bien sûr <ça fait vraiment ee> tu tu dors là-haut et tu fais ta vie en bas quoi.

A69 : 私は、T1 (部屋のタイプ。小さい風呂付きの部屋。)、T1 を見たよ。町の中心地で、15平方メートルのロフトが付いた35平方メートルのワンルームマンション。 <それ、それは> 390 ユーロだよ。

B69 : えっ本当？

A70 : だから、えーっと

B70 : (住むのが) 一人だけの時のロフトは悪くないよね。

A71 : そりゃもちろん。 <それは本当にあの一> 上で寝て、下で生活できる。

飯田 (2013 : 12)

以上の先行研究をまとめるならば、 *parce que* の用法を以下のように整理することが出来る。

- ① 因果関係、もしくはそこから派生する意味を表す
  - A) 陳述内容の「理由」の説明
  - B) 発話行為の「動機」の説明
  - C) 認識の「根拠」の説明
- ② ある要素のメタ言語的な言い換え、あるいは情報補足
- ③ 独立した発話に「強調」や「確認」といったモーダルな価値を付与

*Parce que* は、①の用法では、接続詞、あるいは談話的コネクターとして、2つの要素を「因果関係」もしくは、それに派生する意味関係に結び付ける機能を果たす。一方、②、そしてとりわけ③の用法は「因果関係」とは呼びにくい用法である。②では、 *parce que* は挿入句的に先行する要素に続き、発話としては独立性の低い要素を導いている (Débaisieux, 2013 : 200)。

ここで、*parce que* は、単に「因果関係」を表すのではなく、先行する要素を別な表現で言い換えたり、情報を付与したりする役割を果たしている。また、③の用法では、12 や 13 の例を見ると分かるように、主節の形式がはっきり現れていないことが多い。また、*parce que* の後に続く要素が非常に独立性の高い形式をなしているという特徴もある（12 では疑問文、13 では左方遊離構文）。飯田（2013 : 42）も述べているように、③は、一般言語学の分野でも研究が進められている「非従属節化（*insubordination*<sup>43)</sup>」のケースであるように思われる。この非従属節化という現象は、*parce que* 以外の接続詞（*si*, *quand* など）にも観察される傾向であり、接続詞全般に関わる問題である。したがって、③の用法は *parce que* が持つ固有の「因果関係」から派生した意味効果と考えているだけでは、解明できず、むしろ別な視点からの分析を要する問題であるように思われる。

さて、この用法の分類を、統語的特徴と組み合わせてみよう。*Parce que* A はもっぱら①の用法に限られる。主節の動詞の状況補語節を導く接続詞としての統語的特徴を十分に備え、意味的には「主節が表す陳述内容の理由」を表す。ただし、談話レベルで見ると、主節と従属節が一体となって、談話における最小単位、すなわち一つの発話を構成する場合と、そうではない場合があるので注意が必要だ。後者は、マイクロ文法的には、主節の支配を受ける要素でありつつも、会話のターンなどに現れたり、独特のイントネーションやポーズを伴いつつ、主節から切り離されたりして、主節とは別の発話単位を構成する用法である。（Débaisieux 2013, 226）はこのような単位を ‘épexégèse’ と呼ぶ。

一方、*parce que* B は、マイクロ文法のレベルでは、主節動詞の支配を受けず、等位節に近い独立性の高い性格を持つ。そして、その点において、*car* に近づくと考えられる。9 から 13 の例を見ると分かるように、その意味的・語用論的な価値は実に広い範囲をカバーしている。

#### 4. 3. 先行研究に対する疑問点

以上、先行研究をかいつまんでまとめてみた。*Parce que* が「因果関係」、及びそこから派生する様々な意味を表したり、非従属節化をしたりしながら、機能拡張しているという点については確かにその傾向があると考えられる。しかし、「フランス語において、*car* が機能拡張された *parce que* によって取って代わられており、話し言葉では既に完全に *car* の駆逐が完了したが、書き言葉ではまだその途上にある」という Degan & Fagard (2008 : 135) の主張については、一縷の疑問が残る。現在のフランス語における *car* と *parce que* の話し言葉と書き言葉における分布の違いは、そう単純に割り切れるものであろうか。

この疑問に答えるべく、以下、コーパスに現れた *car* の用例をレジスター毎に詳細に検討する。

5. 書き言葉コーパスに現われる **car**5.1. **Car** が結びつける要素の様々な形式の特徴

先に述べたように、マイクロ文法的な観点から見ると、**car** 節は主節の支配を受けないという点で、**parce que** A 節とは全く異なる特徴を持つ。むしろ、**car** は **parce que** B のように、談話的コネクターとしての役割を果たしている。

一方、談話文法的観点から見ると、**car** 節は談話の中では単独で現れることはできず、常に何らかの先行文脈を必要とし、その先行文脈に現れる要素についての新情報を与える役割を担うと考えられる。**Car** が主節に後置されることが多いのは、情報構造的な特徴によると考えられる。

さて、**car** の先行文脈に現れる要素は、単に「節」や「文」に限らず、実に多様な形式を取る。コーパスの中には、語 (14)、句 (15)、節 (16)、文 (17) が観察される。また、接続する要素との間に、書記上の区切り (ピリオド、コンマなど) を持つ場合もあれば、そのような区切りなしに接続する場合もある。一般に、独立した発話同士の関係を表す際には、はっきりとした区切りが (17)、そうでない場合には、弱い区切りが (16) 選択される。

(14) *La robe la plus applaudie s'appelle « Muguet », l'autre « Nuit », **car** elle est toute noire.*

最も喝采を博したのは「すずらん」というドレスと、もう一つは「夜」というドレスである。というのも、そのドレスは真っ黒だったからだ。

(Le Monde)

(15) *Une volonté abandonnée, **car** elle risquait d'être taxée.*

その試みは撤回された、というのも、それは課税される危険性があったからだ。

(Le Monde)

(16) *Gara lui avait dit qu'il ne pouvait rien faire car le dossier était entre les mains des autorités allemandes.*

ガラは彼に「書類はドイツ当局の手中にあるので、自分にはどうすることもできない」と言った。

(Le Monde)

(17) *J'ai répondu à toutes. **Car** ce qu'il m'arrive de publier, j'en réponds.*

私は全ての質問に答えた。というのも、自分が出版することになるものについては、私は答える主義だからだ。

(DOUBROVSKY Serge, *Un homme de passage*, 2011, p. 426)

また、car はこうした先行文脈のある要素に対して、「節」だけではなく、様々な要素を後続させることが出来る。例えば、以下の例に見るように、独立したモダリティ<sup>14)</sup>を伴った発話を導くことがある。

(18) Ils avaient survécu, ils survivaient à tout, ils allaient gagner. Ils étaient eux tous une machine de guerre sans états d'âme, et Salagnon était un des pilotes de cette machine, chef de meute, centurion, guide de jeunes gens qui s'en remettaient à lui, et le long des rues la population française d'Alger les acclamait. La population française ; car y en avait-il une autre ?

彼らは生き残った。彼らは全てにおいて生き残っていた。彼らは勝利をおさめようとしていた。彼らは全員が感情を持たない戦争の機械であった。サラニョンはこうした機械のパイロットの一人であり、百人組の兵士たちの長であり、彼の元に集まる若者たちの導き役であった。そして通り沿いでアルジェのフランス人たちは彼らに喝采を送っていたのである。フランス人、それ以外の誰がいただけるか？

JENNI Alexis, *L'Art français de la guerre*, 2011, p. 503

ここでの car は事実の理由を説明する用法ではないことに注意したい。この car を削除して、*La population française ; y en avait-il une autre ?* といったとしても、文法的な誤りはなく、かつ意味論理的な関係も変わらない。「通り沿いでアルジェのフランス人たちは彼らに喝采を送っていた」という内容に対して、喝采を送っていたのが、「他ならぬフランス人であった」ことを強調するために、反語的な疑問文を導いていると考えることが出来る。

このように、car が疑問文を導く例は Frantext に 16 例、Le Monde には 1 例見つかった。客観的に事実を報道する書き言葉よりも、主観的で自由な表現形式を追求する傾向のある文学作品の中により多くの例が出ているという点が興味深い。ちなみに、他の文のタイプ（感嘆文、命令文）を導く例はいずれのコーパスにも見つからなかった<sup>15)</sup>。

また、以下の例のように、後続する「節」の一部が省略された例も観察された。この例では、car (ils sont) arrivés trop tardivement を補って解釈することが出来る。

(19) Celui-ci lui transmet les pouvoirs et des votes rejetés car arrivés trop tardivement.

この人物は彼に権力と無効とされた票を渡した。(無効票) というのも、届いたのが遅すぎたからである。

また、**car** はもともと他の談話コネクターと共起しないのだが、一つだけ例外があり、**en effet** (なるほど、確かに) と共起することが出来る。この点については、既に辞書や文法書などにも記載されている。**Car en effet** は、実際には「理由」や「根拠」を表現してはおらず、ただ、**en effet** を強調する役割を果たしている。実際、**et en effet** と言い換えてもあまり意味の変化はないと言われている。以下に例を挙げておく。

(20) Il m'arrive, depuis, d'observer un étudiant, de contempler son allure juvénile, en me disant « voilà, avoir vingt-cinq ans, c'est ça ». **Car en effet**, mon père n'a jamais dépassé l'âge qu'ont certains de mes étudiants.

それ以来、私は一人の学生を観察し、そしてその若い足取りをじっと見つめるようになった。独り言を言いながら。「ほら、25歳だ、そうだ。」実際、私の父は、私の学生たちの何人かの年齢を超えるまで生きることはなかったのだ。

(AUDIN Michèle, *Une vie brève*, 2012, p. 80)

以上が、**car** によって結び付けられる要素の形式的特徴、共起することが出来る要素についての観察である。

## 5. 2. **Car** の用法分類

ここでは、Frantext と *Le Monde* それぞれのコーパスから 250 例をアトランダムに抽出し、計 500 例について、その用法を細かく観察することにした。用法分類については、先の **parce que** の分類を応用することにした。また、それに加えて、④の従属節化した用法を分類する。これについては後に説明する。

- ① 因果関係、もしくはそこから派生する意味を表す
  - A) 陳述内容の「理由」の説明
  - B) 発話行為の「動機」の説明
  - C) 認識の「根拠」の説明
- ② ある要素のメタ言語的な言い換え、あるいは情報補足
- ③ 独立した発話に「強調」や「確認」といったモーダルな価値を付与
- ④ 従属的用法

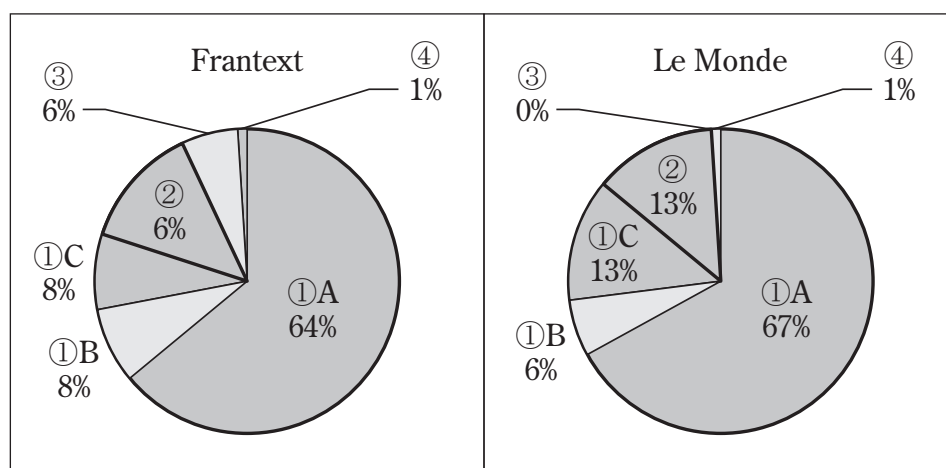
各コーパスにおける各用法の頻度数を表 4 に示す。また、それぞれのコーパスに現れた **car**

の用例全体の中での各用法の占める割合をグラフ 2 に表す。

表 4：書き言葉コーパスにおける car の用法分類

用法分類	Frantext	Le Monde
① A) 陳述内容の理由を説明	161	168
B) 発話行為の動機を説明	20	14
C) 認識の根拠を説明	20	33
②先行する要素の説明	32	33
③独立した発話の強調	16	1
④従属的用法	2	2

グラフ 2：書き言葉コーパスに現われる car の用法分類



以上の数値から、Frantext と Le Monde では、car の用法の大半が① A の用法であることが分かる。また① A、① B、① C、② の用法の頻度数に関しては、2つのコーパスの間に、特に有意な違いは見られなかった。しかし、③に関しては、Frantext により多くの例が観察された。

### 5.3. ① A：陳述内容の「理由」を説明する用法

例えば、Il est rentré chez lui, **car** il était fatigué (彼は帰った。疲れていたから) という文を、Il est rentré chez lui, **parce qu'il** était fatigué (彼は帰った。疲れていたから) と書き換えても、論理的な意味は変わらないだろう。このように、car には parce que A のように、「陳述内容」それ自体に対する「理由」の説明をする機能がある。また、このような用法において、car 節と主節の意味的な結びつきが強いことは、書記上の区切りがないことから分かる。

(21) *Malheureusement, il est extrêmement difficile pour un homme politique d'avancer un tel raisonnement car il est politiquement dangereux.*

不運なことに、政治家にとってこのような論理を推し進めることは非常に難しい。なぜならそれは政治的に危険だからだ。

(Le Monde)

(22) *L'heure n'était plus aux sentiments mais au ravitaillement car la faim gouvernait les esprits.*

もう感情を云々しているときではなく、食事をするときであった。なぜなら、空腹が精神を支配していたからだ。

(Le Monde)

また、**car** 節によって表されるのは、直接的な「理由」だけではなく、もっと間接的な「理由」—例えば先行する要素が表す事実の起こった「状況」や「背景」である場合がある。23では「目的地」に向かって歩いている「状況」が、24では、彼女が一生懸命転ばないように歩いているのに、それを振り返りもせず、心配もしない彼の様子が説明されている。

(23) *Il y eut un peu de confusion pour organiser le départ, la foule gagnait maintenant la rue, la maison se vidait et l'on se mit en ordre de marche. Car on se rendait à pied jusqu'à l'église de Gentilly, à deux rues de là : c'était une idée de Viviane que de traverser le bourg, comme les noces de campagne autrefois.*

出発の準備にはちょっとした混乱が生じた。人々は今や通りに辿り着いた。家は空っぽになり、人々はみな整然と歩き始めた。というのも、人々はそこから2つ通りを隔てたジャンティの教会まで歩いて移動しているのであった。昔の田舎の結婚式のように、町を横切ろうというのはビビアンンの考えだった。

Frantext : GARAT Anne-Marie, *Pense à demain*, 2010, p. 115

(24) *Mettant ses pas dans ses pas, tenant difficilement l'équilibre, elle s'efforçait de ne pas glisser, car il ne se retournait pas, ne s'inquiétait pas de savoir comment elle se débrouillait pour ne pas tomber, la courtoisie ne l'étouffait pas.*

慎重に足を運びながら、バランスを失いそうになりながら、彼女は滑らないように一生懸命だった。彼は振りかえりもせず、彼女が転ばないようにどうしているかを知らうと心を



砕くこともなく、礼儀正しさから息がつまることもないようだった。

Frantext : GARAT Anne-Marie, *Pense à demain*, 2010, p. 295

以上の 2 つの例では、**car** を取ってしまっても、あるいは **et** に変えてしまっても、その論理の意味は変わらない。その意味で非常にゆるい「因果関係」を表しているように思われる。また、これらの例では、書記上の区切りもはっきりしており、主語との因果関係が弱いものであることが分かる。

#### 5. 4. ① B : 発話行為の「動機」を説明する用法

この用法は、先の **parce que B** でも見たように、先行する要素を発話行為としてとらえ、その発話行為がなぜ行われたかを説明する談話コネクターの用法である。「言語行為的」あるいは「間主観的」といわれる用法である。書き言葉では、話者と読み手のやり取りが行われるわけではないので、「間主観的」という言葉を使用することは正確ではないかもしれない。以下の例のように、先行する要素が、疑問文の形で現れており、読み手の立場を想像して疑問を投げかけている。その発話行為自体の行われた理由を **car** が説明しているものがほとんどであった。

(25) Dès lors, les économies concernées peuvent-elles engager des paris d'une telle ampleur à partir de projections abstraites d'une dynamique de croissance reposant sur de bien fragiles bases ? **Car** le problème de fond semble bien être le rapport entre, d'une part, les Occidentaux, inventeurs et détenteurs de la technologie moderne, et des sociétés qui n'ont pas souvent fait l'effort de s'adapter à cette modernité technologique.

それゆえに（この計画に）関係する経済は、弱体化した基盤に根ざした成長の活力によって抽象的に投影されるものから、このような大きな賭けをすることができるのだろうか？ というのも、奥に潜む問題は、一部には、西洋人、つまり、現代の技術を発明し、保持するものと、こうした技術の現代性に対応しようという努力をあまりよくしない企業との間の問題であるように思われるから。

(Le Monde)

#### 5. 5. ① C : 「認識」の「根拠」を説明する用法

これは、認識された事実がどのような根拠によって得られたのかを **car** 節によって明らかにする用法である。以下の例では、「気絶していた」という事実の認識が、必然的に起こる状況

「崩れ落ちる、揺さぶり、頬を叩く」という事実から語用論的に推論されて、「根拠」として説明されていると考えられる。*Car* に先行する要素と後続する要素との関係が「必然的」であると判断されるためには、書き手と聞き手の間に「気絶をすれば崩れ落ちるだろうし、気づかせるために誰かが揺さぶったり、頬を叩いたりするのだ」という常識的な知識の共有がなくてはならない。

(26) *Elle dut perdre connaissance un instant, car elle était assise à présent, ou plutôt affalée dans une encoignure de porte, Leni la secouait, elle la giflait.*

彼女はちょっとの間意識を失ったに違いなかった。というのも、今彼女は座って、というか、部屋の角に置かれた棚に崩れ落ちていて、レニが彼女を揺さぶり、頬を叩いていたからである。

(GARAT Anne-Marie, *Pense à demain*, 2010, p. 331)

#### 5. 6. ②先行する要素に対する補足的説明

この用法は、ある要素について補足的に説明を行う機能を持つ。以下の例では、それぞれ *trente-deux* (32)、*elles* (女性) を説明している。以下の例のように、説明を加える要素の直ぐ後に *car* 節が挿入される例がよく現れる。先行する要素それ自体について、メタ言語的に説明することによって、*car* は新しい情報を補足していると考えられる。

(27) *Mia est synonyme de « cacou », « titano », ou « trente-deux ». Trente-deux car il y a trente-deux dents dans une bouche.*

*Mia* は *cacou*, *titano* あるいは *trente-deux* の同義語である。*Trente-deux* (32) というのは、口の中には 32 本の歯があるからだ。

(Le Monde)

(28) *Ils et elles (car les femmes sont les grandes animatrices de cette démocratie à la base) se sont détournés de la vie politique nationale mais agissent à d'autres niveaux.*

男性も女性も（というのも女性は基本的にこうした民主主義の大きな推進役なので）国の政治活動から遠ざかり、別なレベルで行動している。

(Le Monde)

#### 5. 7. ③独立した発話を強調する用法

この用法において、*car* は談話的コネクターであるよりは、独立した発話を談話の中に導入

し、その要素を「強調」する機能を果たしている。また、その際にモーダルな価値を付与する。すなわち **car** は書き手の陳述内容に対する態度を表す要素であり、主観的な性格を持っている。そういうわけで、この用法が、客観的な事実の報告や分析を行う報道文よりも、文学作品においてより多く観察されたのではないかと思われる。

#### 5. 8. ④従属的用法

ここで挙げる例は、いずれも、①から③には属さない例である。なぜかという、**car** が従属節的な性格を持っていると判断されるからである。先にも述べたように、**car** は、本来 **que** による受け直しはされない。しかしながら、以下の例では **que** による受け直しが観察される。こうした例は、Grévisse & Goose (2012 : 319) で指摘されるように、非規範的な例として考えられており、その出現もごく少数に過ぎない。もっと多くの例を観察するために、Frantext のコーパスを広げて、1950 年代以降の文学作品に設定したみたところ、以下のように、**car** を **que** によって受け直すものが 26 例観察された。その全てが、**parce que A** によく似た意味関係を表す① **A** のタイプの例であったことが興味深い。

(29) Dieu ne l'aimait pas **car** elle était une fille **et que** jamais des filles Dieu se laisse approcher.

神は彼女を愛していなかった。彼女が女の子で、そして神は決して女の子をそばに近寄らせないからだ。

(Frantext : DELAUME Chloé, *Le cri du sablier*, 2001, p. 77)

(30) Au début, je l'appelais le crapaud **car** elle est petite, **et que** j'aime bien les crapauds.

最初は、私は彼女を蛙と呼んでいた。というのも、彼女は小さいし、私は蛙がすきだからだ。

(Frantext : DUVIGNAUD Jean, *L'Or de La République*, 1957, p. 283)

また、とりわけ新聞などでは、**Pourquoi ?** の答えに **parce que** の代わりに、**car** を用いることがある。

(31) Pourquoi « légionellose » ? **Car** cette entité pathologique a pour la première fois été identifiée à la suite d'un congrès de l'American Legion Association, organisé en août 1976 dans un hôtel climatisé de Philadelphie (Pennsylvanie) l'épidémie avait alors provoqué la mort de vingt-neuf personnes.

なぜ「レジオネロス」なのか？ それは、フィラデルフィア（ペンシルバニア州）のエアコン付きのホテルで 1976 年 8 月に開催されたアメリカ外人部隊協会の会議にちなんで、この病体的実体が始めて特定されたからである。このとき、この伝染病によって、29 人が死亡した。

(Le Monde)

また、大多数の例において、*car* はある要素に後続するのであるが、Le Monde に 1 例 Frantext に 2 例だけ、要素に先行して現れる例が見つかった。

(32) Ce beau livre est un livre noir. Il commence ainsi « **Car** nous ne savons rien de clair, nous errons ».

この美しい本は闇本である。これは以下のように始まる「我々は何も明らかなことを知らないが故に、さまよっている。」

(Le Monde)

*Car* は本来、ある要素について、新情報を付け加えていく機能を持つが、このように、文頭におくことによって、あたかも当然の理由を明示し、当然の帰結としての結論を *car* によって導くという、「必然性」を強調する修辭的な効果を狙っていると考えられる。あまりに例が希少なために、前置される *car* 節にどのような意味効果があるのかを知ることはできなかったが、文頭に現れ、既知の事実を理由や根拠として導く *puisque* に非常に近い働きで用いられているのではないかと予想される。このような例も一種の従属節化の一つと見ていいだろう。

## 6. 話し言葉における *car*

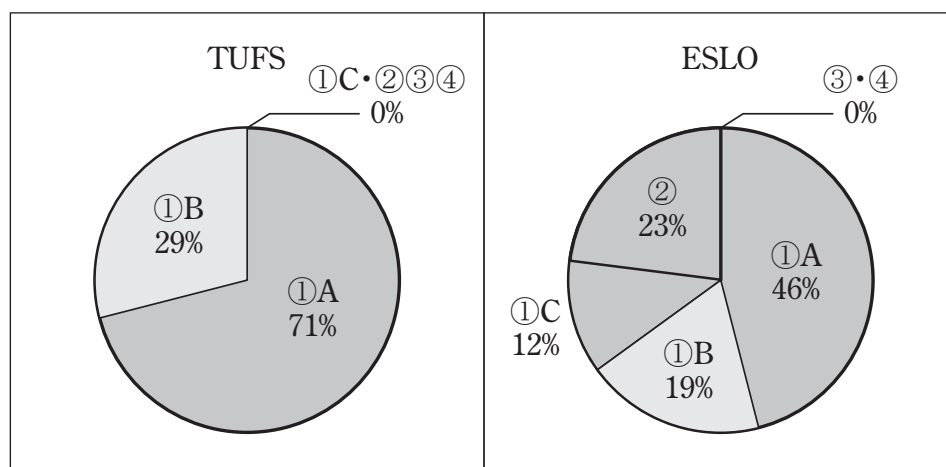
### 6. 1. フォーマルな話し言葉に多用される *car*

さて、次に話し言葉に現れる *car* について見て見よう。コーパス TUF5 に現れる *car* の割合は極めて低く、わずか 7 例のみであった。一方、ESLO では、52 例が見つかった。以下に結果を示す。

表 5 : 話し言葉に現れる car の用法分類

用法分類	TUFS	ESLO
① A) 陳述内容の理由を説明	5	24
B) 発話行為の動機を説明	0	10
C) 認識の根拠を説明	0	6
②先行する要素の説明	0	12
③独立した発話の強調	0	0
④従属的用法	0	0

グラフ 3 : 話し言葉コーパスに現れる car の用法分類



Car はフォーマルな話し言葉に好まれる形式だ。なぜくだけた日常会話の TUFS の中に 7 例の例が現れたのかという点については、社会言語学的な視点からの調査・分析が必要であるように思われる。幾つかの例を挙げておくと、用法という観点から見て、他のコーパスで観察される用法から逸脱するようなものはなかった。

(33) il faut écrire souvent c'est pour ça que j(e) fais les feuilles deux voire même trois fois **car** à chaque fois c'est pas seulement réviser les points de grammaire c'est écrire, écrire les kanjis.

よく書かなくちゃだめよ。だから私は練習問題を 2 回、さらには 3 回もやるの。というのも、毎回文法のポイントを見直すだけじゃなくて、書くのよ。漢字を書くの。

(TUFS)

(34) **Mais il faudrait bientôt y retourner car je n'ai plus de nouilles chinoises.**

もうすぐまた（アジア料理のスーパーマーケットに）また行かなくちゃ。だって、中華麺がもうないんだ。

(TUFS)

(35) **Cet été je travaillais dans un camping avec une piscine et tout et je je j'allais dans le local de de la piscine car bon voilà je je je faisais de l'entretien là-bas donc je vais dans le local**

この夏、僕はプールだとかいろいろなものがあるキャンプ場で働いていたんだ。それで、プールのある場所に行ったんだ。うん、ほら、そこでメンテナンスしていたからね。だからプールの場所に行くんだ。

(TUFS)

フォーマルな話し言葉である ESLO には、書き言葉のコーパスに比べて、陳述内容の理由を説明するものが少なく、逆に認識の根拠を説明したり、発話行為を正当化したりする用法の割合が多いことが分かる。これは話し手と聞き手の間のインタラクションにおいて **car** が用いられることが多いという点から説明が出来るだろう。以下はインタビューの例である。ここでは、B は、A が言った内容（一晩よりもちよっと長いくらいの時間がかかる直行便だ）に対して、その根拠を語用論的に推測して「ということはいつも夜行便で旅行するのか」と聞いている。A の言ったことを別な言葉で要約し、言い直している例だとも考えられる。

(36) A : (飛行機について) **ça fait un peu plus long que la nuit c'est direct**

B : **oui car en général vous voyagez la nuit euh ?**

A : **oui la nuit, c'est plus simple**

A : 一晩よりもちよっと長くかかりますかね。直行便です。

B : そうですね。ということはいつも、夜行便で旅行なさるんですか。

A : ええ。夜の方が簡単ですから。

(ESLO)

以下の例では、**beaucoup de dépannage** という言葉に意味を B に説明するために、**car** を使っている例である。講演の質疑応答などで、用語をよりの確に使用し、定義する場面で用いられる **car** の用法である。

(37) A: (B の質問に対して) *pour dire beaucoup de dépannage*

B: *je vous remercie*

A: *beaucoup de dépannage car euh certainement sur la vie y en a pas mal qui veulent pas faire beaucoup d'entretien.*

A: たくさんの修理というのは、

B: ありがとうございます。

A: たくさんの修理、というのは、確かに生活において、あまり多くのメンテナンスをしたがらない人が結構いるからなんです。

(ESLO)

以上に見るように、講演での質疑応答やインタビューといった場面に好まれる用法は、文学作品や新聞などの書き言葉で好まれる用法とは多少異なることが分かる。残念ながら、ESLO の例の中には、Frantext で見られたような *car* の非規範的な用法 (先の 29 から 32) を観察することができなかった。しかし、これはコーパスの大きさの限界と言う問題もあるので、今後さらに大規模なコーパスを用いて再調査する必要がある。話し言葉でも、*car* が従属化した例は観察される可能性は十分にありと予想される。

### 結びにかえて

以上が、コーパスに依拠した *car* の用法記述である。*Car* は、*parce que A* とは異なり、統語的な制約がなく、先行文脈に現れた様々な要素の表す内容や発話行為に対して、別な要素を幅広い意味での「因果関係」(理由、背景、状況)によって結びつけたり、先行文脈に現れた要素に後続して、メタ言語的に説明したり、情報を補足したりする。また、独立性の高い発話を談話の中に導入する役割も果たす。

レジスターの違いという点では、話し言葉よりは、書き言葉に好まれる形式である。話し言葉では *parce que B* が *car* に非常に近い機能を果たしており、フォーマルな話し言葉を除き、*car* は確かに *parce que* に取って替わられている。

標準フランス語の中には定着しておらず、マージナルな例ではあるが、コーパス駆動型の調査をすることによって、文学作品や新聞などのフォーマルな書き言葉という固有のレジスターの中で、*car* の従属的用法の例が観察された。*Parce que* が非従属節化する一方で、一部の慣用の中では、*car* が従属節化を起していることを示す興味深い現象だ。文法化は必ずしも一方向に働くとは限らない。意味の派生を伴いつつ従属節が等位節化するという過程だけではなく、等位節が従属節化する過程も見逃してはならないだろう。

また、文法化の過程は、言語の体系的な構造の変化を伴うので、一つの要素の変化は他の要素の変化を引き起こす可能性がある。*Parce que* と *car* 以外の要素、*comme* や *puisque* がその中でどのような影響を蒙っているのかという点については、今回全く触れることができなかった。今後の課題としたい。

### 註

- 1) Biber & Conrad (2009 : 6) 'a register is a variety associated with a particular situation of use'.
- 2) *Analyse et Traitement Informatique de la Langue Française* : フランス語の分析と情報処理
- 3) *European Language Resources Associations* : ヨーロッパ言語資料協会
- 4) *Etudes Socio-linguistiques des Orléans* : オルレアン人の社会言語学的研究
- 5) ③正確には、0.0024%。
- 6) ATILF が Frantext に基づいて作成したオンライン辞書 (<http://atilf.atilf.fr/>)。
- 7) TLFi では記述されていないが、後に見るように、一部の慣用において、*car* の *que* による受け直しは観察される。
- 8) 本稿の調査では、主節よりも前におかれた *car* は少数であるが存在する。
- 9) 4 で触れる *Parce que* A タイプの用法である。
- 10) エックス・マルセイユ大学の研究チーム GARS (Groupe Aixois de Recherche en Syntaxique) が収集した話し言葉コーパス。レジスター毎に整理された 400 万語規模のコーパス。残念ながら今のところ、外部からのアクセスが出来ない。現在、Débaisieux が代表を務める ORFEO (*Outil de Recherche du français écrit et oral*) に統合される計画が進められている。
- 11) マクロ統語論の最小単位は独立して発話行為を行うことが出来る *noyau* 「核」という単位である。それに付随し、独立して発話行為を行うことが出来ないものを *satellite* 「衛星」と呼ぶ。マクロ統語論はこれらの要素がどのように結びつくかを研究する分野である。
- 12) Débaisieux (2013) では、マクロ文法レベルでの様々な形式的特徴 (会話のターンに現れる、挿入句として用いられる、倒置される、主節を伴わないで現れる) や韻律的特徴によって、談話コネクターとしての *parce que* B の用法を記述している。
- 13) Evans (2007 : 367) 'the conventionalized main use of what, on prima facie grounds, appear to be formally subordinate clauses'.
- 14) ここでは平叙文、疑問文といった文のタイプに関わるモダリティを考える。
- 15) ただし、TLFi には、19 世紀初頭の感嘆文を導く *car* の例が一例挙げられている。

### 参考文献

- Biber, Douglas & al. 1999 *Longman Grammar of the Spoken and Written English*, Harlow, Peeterson education ESL.
- Biber, Douglas & Conrad, Susan 2009 *Register, Genre and Style*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Blanche-Benveniste, Claire & al. 2000 *Choix de textes de français parlé, 36 extraits*, Paris: Honoré Champion.
- Blasco-Dulbecco, Mylène & Capeau, Paul 2012 "Identifier et caractériser un genre : l'exemple des interviews politiques", *Langages* 187 : 27-40.
- Débaisieux, Jeanne-Marie (dir.) 2013 *Analyse linguistiques sur corpus, subordination et insubordination*, Paris: Lavoisier.
- Degan, Lisbeth & Fagard, Benjamin 2008 "(Inter)subjectification des connecteurs, le cas de *car* et *parce que*", *Revista de Estudos Linguísticos da Universidade de Porto vol.3* : 119-136.



- Evans, Nicolas 2007 “Insubordination and its uses”, in : Nikolaeva, I. (ed.), *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*, Oxford University Press, New York : 366-431.
- Grevisse, Maurice & Goose, André 2011, *Le Bon Usage*, 15e edition, Auflage, Duculot.
- Groupe λ-1. 1975 “Car, parce que, puisque”, *Revue Romaine* 10 : 248-280.
- Martin, Rigel et al. 2011 *Grammaire méthodique du français*, Paris, PUF.
- Moeschler, Jacques 2009 “Causalité et argumentation : l'exemple de parce que”, *Nouveaux Cahiers de linguistique française* 29, Université de Genève : 97-110.
- Moeschler, Jacques 2011 “Causalité, chaînes causales et argumentation”, (in) Corminboef, G. ; Béguelin, M.-J.(dir.). *Du système linguistique aux actions langagères, Mélanges en l'honneur d'Alain Berrendonner*, Bruxelles, Duculot : 339-355.
- Sweetser, Eva. E. (1990). *From etymology to pragmatics metaphorical and cultural aspects of semantic structure*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Traugott, Elisabeth, Closs 2003 “From subjectification to intersubjectification”, (in) R. Hickey (ed.) *Motives for language change*, Cambridge, Cambridge University Press : 124-139.
- 飯田理恵子 2013 『フランス語の話し言葉における従属接続詞 parce que の機能的拡張—日本語の「カラ」との比較を通じて』 修士論文 名古屋大学 国際言語文化研究科 日本言語文化専攻

## La conjonctive de cause ‘*car*’ en français - en comparaison avec la conjonctive de cause ‘*parce que*’ -

AKIHIRO Hisae

Dans ce travail, nous proposons une étude descriptive sur la conjonctive de cause ‘*car*’ comparée à la conjonctive de cause ‘*parce que*’.

Dans la grammaire normative, la distinction entre les deux conjonctives est expliquée par deux modes différents de connexion ; ‘*car*’ est coordonnant tandis que ‘*parce que*’ est subordonnant. Pendant longtemps, cette dichotomie n’a pas été remise en question.

En nous appuyant sur une étude de 4 corpus écrits et oraux, nous constatons que la distinction entre les deux dépend avant tout d’usages différents de la langue. Nous observons que ‘*car*’ est une forme nettement favorisée à l’écrit (littérature, presse) et à l’oral formel (discours, entretien, conférence). En effet, nous n’en attestons que très peu d’exemples dans l’oral informel (dialogue quotidien).

Des études récentes montrent que ‘*parce que*’ est polysémique : d’une part, elle fonctionne comme conjonctive de subordination, d’autre part, comme connecteur discursif. Certains auteurs tentent d’expliquer ce phénomène par la notion de « glissement de sens » et celle d’« insubordination ». Cet élargissement de la fonction de ‘*parce que*’ semble permettre de remplacer ‘*car*’ surtout dans l’oral informel.

Par ailleurs, nous observons des exemples de ‘*car*’ possédant des caractères syntaxiques de subordination. Il est intéressant de voir que la grammaticalisation se produit dans deux sens opposés : d’une part l’‘insubordination’ de ‘*parce que*’ et d’autre part la ‘subordination’ de ‘*car*’. Cependant, l’emploi subordonnant de ‘*car*’ reste marginal dans le français standard actuel: il ne s’observe que dans des usages particuliers, tels que l’écrit littéraire et l’oral formel des intellectuels.

Nous concluons que la dichotomie entre la coordination et la subordination est floue et contestable. Car il est impossible de tracer la frontière entre les deux, face à l’hétérogénéité de la réalité linguistique.